

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXV, 2021

国際仏教学大学院大学研究紀要
第25号（令和3年）

金剛寺聖教に見られる『龍樹菩薩和香方』逸文

落
合
俊
典

金剛寺聖教に見られる『龍樹菩薩和香方』逸文

落合 俊典

緒言

東アジア仏教において龍樹は八宗の祖と称される最も代表的な学僧であるが、医薬に関した著述も存したようである。経録には香葉に関連した『龍樹菩薩和香方』(勒那摩提訳。六世紀前葉の翻訳か。)の名が見える^①。本書は唐代の中期頃に散逸したと想定される。日本には伝来していたが、これも平安時代の院政期頃までには散逸したと考えられる。

天台宗の学僧が、本書を不空訳『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』の巻末に参考資料として付したようである。大阪府河内長野市の天野山金剛寺に存する金剛寺聖教にその微影が伝わる。但し原文は「龍樹菩薩合香方」となっているが、今は通称に従い『龍樹菩薩和香方』とする。

ここには逸文三條(法)が見えるが、経録には全体で「五十法」と伝えているのでその比率は6%ということになる。恐らくその天台密教の学僧は、実際に『龍樹菩薩和香方』本文を見て引用したと想定される。

従来の研究では『龍樹菩薩和香方』の逸文は全く報告されていないが、僅か三條(法)とはいえ全体を窺

う重要な資料となるに違いなく、逸文を示して江湖の関心を求めたい。

一 勒那摩提訳『龍樹菩薩和香方』と范曄撰『和香方』

龍樹には香薬に関して『龍樹菩薩和香方』『龍樹菩薩藥方』『龍樹菩薩養生方』『龍樹眼論』『龍樹五明論』『龍樹菩薩五明論秘要隱法』『龍樹出印法』『龍樹菩薩馬鳴菩薩秘法』などの著述があつたとされるが、本稿では特に『龍樹菩薩和香方』について見ていくものである。

この『龍樹菩薩和香方』は北魏時代にインドの学僧勒那摩提（五〇八）によつて漢訳されたと伝えられている。ところで半世紀前には『後漢書』の撰集で著名な范曄（三九八～四四五）にも相似した題名の『和香方』という書があつたことが『宋書』列伝に伝えられている。しかも范曄の『和香方』の序を引いて以下のように記している。

撰和香方。其序之曰、「麝本多忌、過分必害。沈實易和、盈斤無傷、零藿虛燥。詹唐粘湿。甘松・蘇合・安息・鬱金・榛多・和羅之属、並被珍於外国、無取於中土。亦棗膏昏鈍、甲煎淺俗、非唯無助於馨烈。乃當彌增於尤疾也。」

此序所言、悉以比類朝土。麝本多忌、比瘦炳之。零藿虛燥、比何尚之。詹唐粘湿、比沈演之。棗膏昏鈍、比羊玄保。甲煎淺俗、比徐湛之。甘松蘇合、比慧琳道人。沈實易和、以自比也。（『宋書』列伝二九）

（范曄）和香方を撰す。其れ之に序して曰く、「麝（香）は本より忌するところ多く、分を過ぎれば必ず害す。

沈(香)は實に和し易く、斤に盈るるも傷うことなし。零藿は虚燥にして、詹唐(糖)は粘湿なり。甘松・蘇合・安息・鬱金・榛多・和羅の属は、並に外国に珍せらるるも、中土より取ること無し。亦、棗膏は昏鈍、甲煎は浅俗、唯だ聲烈を助くること無きに非ず。乃ちまさに尤疾を彌増するなり」と。

此の序の言う所、悉く以つて朝土に比類せり。「麝本多忌」は「瘦炳之」(三八八〜四五〇)に比する。「零藿虚燥」は「何尚之」(三八二〜四六〇)に比する。「詹唐粘湿」は「沈演之」(?〜四四九)に比する。「棗膏昏鈍」は「羊玄保」(三六九〜四六四)に比する。「甲煎浅俗」は「徐湛之」(四一〇〜四五三)に比する。「甘松蘇合」は「慧琳道人」(生没年未詳)に比する。「沈實易和」は以て自ら比するなり。

この序文に依れば香薬に関する范曄の知識が豊富であつたことが十分に推察されるであらう。本書は当時広く知られていたに違いないが、『隋書』経籍志にその書名は存しない。ただ『又范曄上香方』と『雜香膏方』という二書が見られるので范曄に香薬の著述があつたことは疑いがないであらう。唐の道世撰『法苑珠林』卷三十六の「華香篇」に僅か一文であるが、范曄『和香方』が引用されている。

甲香。廣志曰、甲香出南方。范曄和香方曰、「甲煎糝香」⁽⁵⁾是也。(『大正藏』五三卷五七四頁上段四行)

また『証類本草』(一一〇〇年頃)には「藿香」について「范曄和香方云。零別説云、謹按藿香」とあるという。さらに日本平安時代後期に成立した『香葉抄』の表紙裏に「范曄和香方」とあるが本文には見えない。原本に欠落があるのかも知れない。⁽⁶⁾ただし『香要抄』の「藿香」の條に「范曄和香方曰、藿香虚燥」⁽⁷⁾とある。

*

*

一方、勒那摩提の『龍樹菩薩和香方』はどうかであろうか。本書名はもちろん『隋書』経籍志にも「龍樹菩薩和香法二卷」として掲載されているが、仏教の経録では費長房の『歴代三宝紀』巻九に勒那摩提訳経として「龍樹菩薩和香方一卷」の名が見られるのが初出である。そのことから隋代には本書が存したことが推測される。

唐に入り、道宣の『大唐内典録』巻四にも勒那摩提の訳経として「龍樹菩薩和香方（凡五十法）」（『大正蔵』五五卷二六九頁下段二行）が見られるが入蔵録には挙げられていない。このころはその後の智昇撰『開元録』に「龍樹菩薩和香方一卷、凡五十法。今以非三蔵教、故不録之」（『大正蔵』五五卷五四〇頁下段九行）とする記述の伏線でもあろう。智昇が「非三蔵教」とする理由は首肯できるが、それでは『金七十論』や『勝宗十句義論』は何故入蔵させたのであろうか。前者はインド六派哲学の教論派（サーンキヤ）の聖典であり、後者は同じく勝論派（ヴァイシエーシカ）の聖典である。明らかに三蔵教ではない。

ともあれ勒那摩提訳『龍樹菩薩和香方』の引用文の痕跡を探ると些か相似した内容の文章が数点見られる。その一つは智昇撰『集諸經禮懺儀』上にある「合香之法」である。

合香之法

沈香一両 煎香一両 薰陸香一両 甘松香一両 零陵香一両 甲香一両 丁香一両

白膠香真（五文） 雞舌香（十二文） 青木香一両 香附子（十文） 白檀香一両

搗羅取末以蜜和之。

（『大正蔵』四七卷四六四頁上段一行〜六行）

この合香法は和香方と称しても良いであろう。要するにブレンドすることである。沈香以下十二種の香を混ぜ和せて、それを羅に搗く、即ちこすり取ることである。その粉末を蜜と和して初めて合香之法の完成である。智昇

が引用した合香之法は何に依拠したのか明確でないが、『龍樹菩薩和香方』の可能性が全く無いとも言えないであろう。唐代の八世紀には仏教の行儀、禮懺儀にとつて諸華の供養と和香方は必須となつていたと言えるのであり、その依拠する聖教は范曄もしくは龍樹の和香方に起源を有するものであつたらう。

もし仮に合香之法が勒那摩提訳『龍樹菩薩和香方』に基づくものとするると勒那摩提の訳出の理由は何処に存したか探る必要がある。彼には『七種礼法』と称される著述があつたと唐代の道宣や道世などが述べている。後者の『法苑珠林』卷三十の「儀式部」に

有西国三藏厥号勒那。觀此下凡居住在辺鄙不閑礼儀情同猴馬。悲心内溢。為翻七種礼法。

文雖広周逐要出之。從僂至細。对僂為邪。对細為正。故階級有七。意存後三也。

（『大正藏』五三卷四三五四段八行〜一二行）

西国に三藏有り。厥の号勒那。此の下凡の居住の辺鄙に在りて礼儀を閑わず、情は猴馬に同じなるを觀て、悲心内に溢る。為めに七種礼法を翻す。文は広く周しと雖も要を逐うて之を出す。僂より細に至る。僂に対して邪と為す。細に対して正と為す。故に階級に七有り。意は後の三に存するなり。

と述べて、第四の「発智清淨礼」に「礼一拜遍通法界。如是香華種々供養」と記しているように香と華を以て仏と一切の法界を供養することが重要であるとしているのである。

インド仏教にそのテキストは存在していたのかも知れないが、仏教の礼儀を欠いた北魏仏教界の現状に飽き足らない勒那摩提は七種の礼法を著した。以下は推測であるが、この動機は香華をもって供養することへの權威性を示す『龍樹菩薩和香方』の翻訳へと進んだと考えられるのではないだろうか。

二 『龍樹菩薩和香方』の日本伝来

『龍樹菩薩和香方』の日本伝来は奈良時代と想定される。『正倉院文書』の天平二十年（七四八）六月十日「寫章疏目錄」の「更可請章疏等」に「龍樹菩薩和香法一卷」（『大日本古文書』三卷八八頁）とあり、その四年後の天平勝宝四年（七五二）九月十九日の「奉請經論疏目錄」に「龍樹菩薩和香法一卷」（『大日本古文書』二卷三八三頁）とある。さらに神護景雲二年（七六八）十月九日の「一切經奉請文書繼文」であるが、これは審詳（審祥にもつくる。生没年不詳。奈良時代大安寺の僧）が「龍樹菩薩和香法一卷」を「勘經所証本二用ヒンガ為メ奉請ス」（『大日本古文書』一七卷二〇頁）としたものであるという。審詳は『仏性義』や『華嚴入法界品抄』など十七部の經論章疏の本文テキスト校訂のために借り出し請求を出したのである。

以上の奈良時代の記録から『龍樹菩薩和香方』が伝来していたことは明白である。ただ、どの記録も「和香方」ではなく、「和香法」とあることに注意しなければならない。

やや時代が下って平安時代の記録では藤原佐世撰『日本国見在書目錄』（八九一年）に本書の名が見える。「龍樹菩薩和香方一卷」（No. 1260）とある。⁽⁹⁾

『日本国見在書目錄』には龍樹に関する書目として、『龍樹菩薩五明論秘要隱法』一卷（No. 1045）、『龍樹出印法』一卷（No. 1138）、『龍樹菩薩眼經』一卷（No. 1307）、『龍樹菩薩印法』一卷（No. 1334）、『龍樹菩薩馬鳴菩薩秘法』一卷（No. 1335。題号下に「沙門菩提造」と書かれている）などが記録されているが、ここで注意を引くのは『諸香方』一卷（No. 1253）である。これは『隋書』経籍志に載る范曄の『上香方』一卷、もしくは宋明帝撰『香方』⁽¹⁰⁾ 一卷の可能性がある。

また丹波康頼（九二二～九九五）が編纂した『医心方』（九八二）の卷二十六「相愛方第五」に

龍樹方云、「取鴛鴦心陰千百日係左臂。勿令人知即相愛」。又云「心中愛女無得由者、書其姓名二十七枚、以井戸華水、東向正視、日出時服之。必驗。密不伝」

『龍樹方』に云く、「鴛鴦の心を取りて、千百日陰し、左の臂に係げ人に知らしむこと勿れ。即ち相い愛せり」と。又云く「心中に女を愛するも由を得ること無ければ、其の姓名を二十七枚に書き、井の華水を以て東に向いて正視せよ。日出る時、之を服すれば必ず驗あり。密して伝えざれ。」

とある。判読し難い箇所もあるが、一応読みかたは半井家本の訓点に従った。

さて本記事の真偽であるが、『法苑珠林』卷五十三に引用された『龍樹菩薩伝』と『付法藏因縁伝』に依れば、龍樹は若き日に隱遁の術（隱身法）によって王宮に侵入したと伝える。

四人依方和合此藥。自翳其身游行自在。即共相將入王後宮。宮中美人皆被侵掠。百餘日後懷妊者衆。

（『大正藏』五三卷六八二頁上段二三行～二六行）

四人、方に依りて此の藥を和合す。自ら其の身を翳し、游行すること自在なり。即ち共に相い將つて王の後宮に入る。宮中の美人、皆侵掠せらる。百餘日後、懷妊するもの衆し。

隱遁の術は、七十種の香葉から選んだ青葉一丸を水に溶いて臉に塗ると「形當自隱」という。龍樹はこれら七十種の香葉を判別できたから驚きである（「龍樹聞香即便識之」）。

龍樹が自在に香薬を用いたという伝承は、何も単に東アジアだけでなくチベットへも伝わっているのでインド仏教世界では人口に膾炙した伝記であったのだらう。¹²⁾ さすれば日本の丹波康頼が中国の医学に関する数多の書籍を博搜し、『医心方』三十巻を十世紀後半に編集した中に『龍樹菩薩和香方』の一文を「相愛方」に入れたことに違和感は無いのである。

このように本書は日本の学僧や知識人の間で知られていた書物であったといえよう。先に述べたように奈良時代の審詳が本文校訂を行ったと述べたが、さらに平安時代の十一世紀前後にも『龍樹菩薩和香方』に関心を懐いた学僧がいたことを報告したい。天台宗の仁範という学僧である。ただし、この人物を探るには前段階としての足跡が残る金剛寺聖教について全体的な考察を必要とする。以下簡略に論述していく。

三 金剛寺蔵中世仏教文献の特徴

天野山金剛寺（大阪府河内長野市）の創建は行基（六六八〜七四九）によると伝承されているがその検証は定めがたいのが現状である。歴史上明確になるのは中興の阿観（一一三六〜一二〇七）からであり、その傍証となる資料も建造物も数多存する。しかし、この高野山真言僧であった阿観が天野山に金剛寺を再建し、活動を展開した点に関して幾つかの問題が見られる。就中、金堂の三尊（大日如来・不動明王・降三世明王）の配置と莊嚴は天台系の円珍様式という問題である。加えて一二世紀から一三世紀におよぶ聖教の過半に、真言密教とは異なる天台系の基本経典である天台三大部（七〇巻中三〇教巻存）や天台密教（台密）の文献が見られることである。

本稿ではその詳細な論及は避けるが、これら台密の文献の多くは園城寺（三井寺）の中世仏教文献と認められるのである。園城寺は天台宗の延暦寺の山麓にあつて、円珍（八一四〜八九二）が住してから寺門派として栄えた。

金剛寺に所蔵される天台三大部は園城寺で書写され、河内の天野山金剛寺にもたらされたものであろう。三大部に見られる訓点は園城寺で用いられた西墓点を中心である。そもそも真言密教の寺院に天台三大部が所蔵されている理由は説明できない。従来は山内における論議のために他宗の学問を検討することとされてきたが、どういふ訳か真言密教の中世文献が質量ともに貧弱であるのに反して台密の文献が多数を占めるのは誰しも納得がいかないであろう。

このような事態が生じたのは阿観阿闍梨が中興した時の支援者に理由があると考えられる。天野山金剛寺再建の大檀越は八条院（一一三七～一二二一）であった。八条院は鳥羽天皇と美福門院（一一一七～一二六〇）との間に生まれた女院で、両者の有していた莊園二百数十カ園を受け継いだと言われている。当時の日本における最大の資産家であったのである。八条院は異腹の兄、後白河法皇（一二二七～一九二二）の影響も受け、三井寺とも関係が深かった。そうであれば自のづから三井寺の様式と聖教とが伝来するであろう。もちろん真言密教の聖教も高山山からもたらされたと想定されるが、一二世紀から一三世紀初頭における聖教で殊に重要なものは園城寺（三井寺）と関係の深いものである。

また当然のことながら叡山山門派の文献も存する。その中で目を引くのは、金剛寺一切経に残る『観無量寿経』である。これは奥書や訓点から比叡山の黒谷に存した經典であることが分かる。この訓点は当時の比叡山で弱小学派が伝承してきた天爾波留点（別流）である上に、黒谷に住した源信の『往生要集』に引用された『観無量寿経』の一文と一致し確実性が高い¹³。本書の奥書には「長寛三年」とあり、この時期、比叡山黒谷にいた僧侶として法然房源空（一一三三～一二二二）がいる。時に法然は、数え年三十三歳であった。法然の著述から傍証する文証は無いが、法然自身が見た『観無量寿経』か、もしくはその写しであった可能性は極めて高い。

次に天台系で興味深い資料は、金剛寺聖教二八箱九三号『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』（不空訳）一卷である。こ

の写本は僧仁範（一〇二九～一〇三二）の所持していた写本の写しと考えられるが、他にも存する仁範の写本等に見られるヲコト点は仁都波迦点である。この訓点は天台宗で用いられたものであるからこれも天台系の資料とすることが出来る。

久米舞子氏の研究に依れば、金剛寺に現存する僧仁範関係の聖教は五点である。¹⁴

- 1 金剛寺聖教二箱三六号 『聖観音儀軌』（不空訳）
奥書「長元二年六月十八日於金峯石蔵奉読之畢」
 - 2 金剛寺聖教二八箱九三号 『仏頂尊勝陀羅尼儀軌』（不空訳）
奥書「正徳三年七月廿七日以金剛寺經藏古本二本／比校示異了（書校本是也）」
 - 3 金剛寺聖教二九箱一三三号 『求聞持法儀軌』（善無畏訳）
奥書「長元五年四月十日於備中国英賀郡／仏性寺□読了僧仁範」¹⁵
 - 4 金剛寺聖教三七箱五号 『薬師念誦儀軌』（不空訳）
奥書「貞元二年三月廿日於金峯石蔵寺読之已／弟子仁範記之」¹⁶
 - 5 金剛寺聖教三七箱七八号 『不動儀軌』（不空訳）
奥書なし。表紙に「天台僧仁範本」とある。
- いずれも密教の聖教であり、三番目の善無畏訳『求聞持法儀軌』以外は不空訳である。
- 天台宗の延暦寺で学んだ仁範は、これら密教文献を延暦寺ではなく、他の寺院で書写したことから「山林修行者」として特定の寺院に属さず読誦・加点了とする見方があるが、これら密教儀軌は山林修行で用いられたとは言えない。各地の寺院で薬師如来像や不動明王、或は虚空蔵菩薩像、聖観音菩薩像の御前にて儀軌に従い行われた修法に他ならないのである。

また、このような五点の密教の聖教が天野山金剛寺に伝来した理由は、前述したように一二世紀の天台宗（山門・寺門）の典籍が少なからず存在することと無縁ではない、と指摘することができるのである。

四 不空訳『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』と『龍樹菩薩和香方』逸文

前述したように金剛聖教には仁範関係の聖教が五点現存するが、その中の不空訳『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』（金剛寺聖教二八箱九三号）の巻末に『龍樹菩薩和香方』が付されている。原文には「合香方」と書かれているが、通称に従い「和香方」とする。「和」も「合」も同義であろう。

『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』の巻末に香の調合法の『龍樹菩薩和香方』が添付されたことについては『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』の本文にその理由が内在している。それ故に『龍樹菩薩和香方』を検討する前に『佛頂尊勝陀羅尼儀軌』はどのような聖教であったのであろうか、という視点で論を進めたい。

仏教の諸潮流は多くがインドの世界から発していることは周知のことであるが、この「佛頂尊勝陀羅尼」もまさにその一例である。奈良法隆寺蔵の貝葉には「尊勝陀羅尼」が梵字で書写されている。¹⁷貝葉は唐代の中原から将来されたのであろうが、本来は明らかにインドの世界に存在していた貝葉に相違ない。インドから中国、中国から日本へと伝来したまさに珍奇な、しかも天下の優品である。「佛頂」は仏陀の頭部の功德、仏智そのものを体現化した名称である。その真言が「尊勝陀羅尼」であって除滅業障、増福延命、除災の功德があると信じられてきた仏教思想である。そのために漢訳は前後七回も存在している。①仏陀波利訳、②杜行顛訳、③地婆訶羅訳、④地婆訶羅訳（別本）、⑤義浄訳、⑥不空訳、⑦善無畏訳等である。

このように多く翻訳されたのは需要があったからであり、当然宗派などグループの所持する經典は異なっていく

る。本稿で問題としている不空訳『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』は、⑥の不空訳の『仏頂尊勝陀羅尼經』に対する儀軌であるが、これは⑦の善無畏訳本が真言宗で用いられたのに対して多く台密で用いられている。仁範が天台宗僧であったこともそれを裏付けるものである。つまり、真言宗御室派の天野山金剛寺に天台系の『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』が存在するのは一二世紀前後に天台宗の思想的影響を強く受けた証左でもある。

さて、『仏頂尊勝陀羅尼經』は仏智を尊崇する尊勝陀羅尼を念誦することを再三説くが、卷末には四種の香を取り上げ、それらを焼香して息災法・增長法・降伏法・敬愛法が成就することを説くのである。經文を適宜読みやすくして以下に示す。

奉送諸佛聖衆。如前禮拜發露懺悔隨喜請發願廻向已。

出道場後即於靜處、讀誦大乘經。觀第一義諦。以此妙福廻向所求、助成悉地。

若作息災法、面向北（坐）。其壇圖。觀聖衆白色。道場中所供養物皆白。身著白衣、面向北坐。燒沈水香。

若作增長法、面向東坐。本尊及供養并自身衣服皆黃色。燒白檀香。

若作降伏法、面向南坐。本尊及供養并衣服並青色或黑色。燒安悉香。

若作敬愛法、面向西（坐）。觀本尊赤色。及飲食衣服皆赤色。燒蘇合香。

（訓読）

諸佛・聖衆を奉り送る。前の如く禮拜・發露・懺悔・隨喜し、發願を請いて廻向し已ぬ。

道場を出でし後は即ち靜處に於いて、大乘經を讀誦し、第一義諦を觀ず。此の妙福を以て求むる所を廻向すれば、悉地を助成す。

若し息災法を作さば、面は北に向いて（坐す）。其の壇圖（?）。聖衆の白色を觀す。

道場中の供養せし所の物皆白し。身には白衣を著し、面は北に向いて坐す。沈水香を燒く。

若し增長法を作さば、面は東に向いて坐す。本尊及び供養（物）并に自身の衣服皆な黄色なり。白檀香を燒く。

若し降伏法を作さば、面は南に向いて坐す。本尊及び供養（物）并に衣服並に青色或は黒色なり。安悉香を燒く。

若し敬愛法を作さば、面は西に向いて（坐す）。本尊の赤色を觀す。及び飲食・衣服皆な赤色なり。蘇合香を燒く。

白色の息災法は沈水香、黄色の增長法は白檀香、青色或は黒色の降伏法は安悉香、赤色の敬愛法は蘇合香を燒く、つまり燒香することだが、敬愛法が蘇合香と関係しているのは興味深い。『医心方』で見られた敬愛法には香の名称が挙げられていないが、この儀軌からそれは蘇合香であったと予想できるのである。

以上のようにして『仏頂尊勝陀羅尼儀軌』は終わる。そこで天台僧仁範は香薬に関した『龍樹菩薩和香方』から幾つか採って卷末に付したのであろう。さて、ではその和香方を閲覧したいが筆者の知識不足から十分な解説ができていないことを述べておかなければならない。原文と訓読とを記して諸賢の批評を願うものである。

【原文 i】

龍樹菩薩合香方

沈香一斤 蘇合香半斤 丁香五兩 白檀香四兩 零陵香三兩 藿香三兩

金剛寺聖教に見られる『龍樹菩薩和香方』逸文（落合）

甘松香三兩 鬱金香一兩 龍腦香一兩 麝香一兩 薰陸香一兩
右件諸香、除蘇合龍腦麝香三味。餘並搗爲末。馬尾羅飾（写本「篋」ニ作ル。「篋」ノ誤字ト見テ訂正ス）相和。其麝
香龍腦細研入諸香末攪和。得所好蜜五升微煎去沫。以新綿濾入。鑊其蘇合微搗碎著蜜。鑊中和煎三兩沸。惣瀉於
諸香末中攪合相和。乾湿得所更入鐵臼中搗一千杵。已來以後、陀羅尼加行千遍、或万遍於白瓦瓶中盛之此。惟是
燒香也。

（訓読）

龍樹菩薩合香方

沈香一斤 蘇合香半斤 丁香五兩 白檀香四兩 零陵香三兩 藿香三兩
甘松香三兩 鬱金香一兩 龍腦香一兩 麝香一兩 薰陸香一兩

右件の諸香、蘇合・龍腦・麝香の三味を除く。餘は並に搗ちて末と爲す。馬尾の羅もて篩い相和す。其の麝香・龍腦を
細く研きて諸の香末に入れ攪和す。得る所の好蜜五升を微煎し沫を去る。新綿を以て濾り入れり。其の蘇合を鑊もて微に
搗ち碎きて蜜に著す。鑊の中に和して三兩を煎し沸す。惣じて諸香の末中に瀉して攪合し相和す。乾湿得る所更に鐵臼
の中に入れ搗つこと一千杵。已來以後、陀羅尼加行すること千遍、或は万遍して白瓦の瓶中に之を盛る。此れ惟うに是れ
燒香なり。

【原文ii】

末香方 沈香一兩 蘇合香一兩 丁子香三兩 白檀香半兩 龍腦香一兩
麝香一兩 其松香三兩（去根） 藿香三兩（去茎） 零陵香三兩
右已上諸香、皆細搗爲末。絹絹羅飾相和。其龍腦麝香細研入諸香末。相和得所如前。加持每念誦轉讀。時取用塗

香手及身。并裏衣惣得。或以好蜜和、日曝乾。用時、以水於石上磨用之。

〈訓読〉

末香方 沈香一両 蘇合香一両 丁子香三両 白檀香半両 龍腦香一両

麝香一両 其松香三両(去根) 藿香三両(去莖) 零陵香三両

右已上の諸香、皆細く搗ちて末と爲せり。絹々の羅もて篩い相和す。其の龍腦・麝香を細く研きて諸香の末に入れり。

相和して得る所は前の如し。加持し毎に念誦・轉讀す。時に用を取り、手及び身に塗る。并に裏衣惣じて得。或は好き

蜜を和し、日に曝し乾せり。用いる時、水を以つて石の上に於いて之を磨き用う。

【原文iii】

小香方

沈香六両 白檀香三両 蘇合香四両 香一両 龍腦香一両 麝香一両

右已上五味香搗和一如前法

此示焼香也。

尊勝陀羅尼念誦儀軌

〈訓読〉

小香方

沈香六両 白檀香三両 蘇合香四両 香一両 龍腦香一両 麝香一両

右已上五味香、搗和すること一に前法の如し。

此れ焼香を示すなり。

金剛寺聖教に見られる『龍樹菩薩和香方』逸文(落合)

小 結

日本の大阪府河内長野市の山中にある天野山金剛寺に伝来した天台僧仁範書写本の写しと想定される『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』の巻末に付された『龍樹菩薩和香方』（原文…合香方）の真偽について考察を試みたが十分な確証を得られたとは言い難い。それは僅かであるが、他書に引用された文章と一致しないこと、筆者の香葉に関する理解不足もあり本文の解読が十分とは言えないことなどが挙げられる。

東洋の広範な香葉について先人の研究は数多存するが、『龍樹菩薩和香方』に関する論考は皆無である。日本の丹波康頼が撰述した『医心方』の引用文は、直接的に和香方は述べられていないからでもあるが、ただそれは蘇合香に関する箇所であった可能性を指摘した点は微細な収穫であるかも知れない。

要するに、奈良時代の正倉院文書（八世紀）と平安時代の『日本国見在書目録』（九世紀）と『医心方』（十世紀）の三つの記事から本書が日本へ伝来していたことはほぼ疑いようのない事実であると言える。金剛寺本の本書は日本に伝来した『龍樹菩薩和香方』の一部であったと見なしてよいだろう。

しかしながら本書が中国で消滅していったのと軌を一にしたように日本でも流星のように儼く消えていったのは那辺に理由があるのであろうか。金剛寺本は十一世紀の中世日本の仏教の一場面を見せているが、『龍樹菩薩和香方』足跡の最後尾であったように思われる。そして同時期に突然澎湃と沸き起こってきたのが香葉に関する類書編纂の機運であった。『香要抄』『葉鈔』『香葉抄』『香字抄』などが本草の諸本と肩を並べて真言密教寺院や天台密教寺院において書写研鑽されたのであった。どれも学的に微に入り細にわたるように整備されているが、

正倉院に秘蔵された蘭奢待のように、諸々の香は殆ど入手困難な貴重品でもあった。修法で塗香の作法が説かれ、灌頂で諸香の準備が愆愆されようとも沈香や白檀香や蘇合香を入手することは困難であった。諸香の調剤法が説かれている『龍樹菩薩和香方』も肝心の香そのものが香炉になれば意味のない書物として経蔵の奥深く唐櫃の底に眠ってしまう結果になったのも当然と言えば当然に違いない。

- (1) 『歴代三玉紀』巻九に勒那摩提訳「龍樹菩薩和香方」巻凡五十法（『大正蔵』四九巻八六頁中段一八行）とある。また『大唐内典録』巻四に同訳「龍樹菩薩和香方凡五十法」（『大正蔵』五五巻二六九頁下段二行）とあり、「右六部。合二十四卷。梁武帝世。中天竺三國三藏法師勒那摩提。或云婆提。魏言寶意。正始五年來在洛陽殿內譯。初菩提流支助傳。後相爭別譯。沙門僧朗覺意侍中崔光等筆受金剛上味陀羅尼經。」と書かれている。さらに『開元録』巻六に同訳「龍樹菩薩和香方」巻凡五十法。今以非三藏教故不録之。」とある。なお、勒那摩提より数世代前になるが、『後漢書』の作者、范曄（三九八～四四五）に『和香方』（『宋書』巻六十九）が存したという。書名から内容も類似していたと思われる。
- (2) 『日本国見在書目録』（『統群書類従』雑部三四、巻八八四。孫猛著『日本国見在書目録詳考』No. 1260上中下。上海古籍出版社。二〇一五年）
- (3) 不空訳『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』（金剛寺聖教二八一～九三）。院政期写本。
- (4) 慧琳道人は『白黒論』（別名『均善論』、『弘明集』巻三「宗居士炳答何承天書難白黒論」）を著した人物。
- (5) 篋香については「沈香者、土人斫斷之、積以歲年、朽爛而心節獨在、置水中則沈、故名曰沈香。次不沈不浮者、曰篋香也。」（『梁書』五四列伝諸夷）とあるように沈香の香木と同類である。
- (6) 『統群書類従』三十一輯上。五七頁。NEW YORK PUBLIC LIBRARYにあるスペンサーコレクションの原本にも引用文は見られない。

金剛寺聖教に見られる『龍樹菩薩和香方』逸文（落合）

金剛寺聖教に見られる『龍樹菩薩和香方』逸文（落合）

一八

- (7) 『統群書類従』三十一輯上。四八頁。
- (8) 石井公成「伝勒那摩提の『七種礼法』について」（『印度学仏教学研究』三二、二、一九八四）
- (9) この番号は孫猛著『日本国見在書目録詳考』（上海古籍出版社。二〇一五年）の通番号である。
- (10) 孫猛『日本国見在書目録詳考』一六九八頁参照。
- (11) 影印版『医心方―半井家本医心方（六）―』（二三七四―二四八一頁。オリエント出版社。一九九一年）。
- (12) 寺本婉雅著『ターラナータ印度仏教史』（丙午出版社。一九二八年）。山野智恵（千恵子）「ナーガールジュナと医術―『龍樹眼論』の成立と展開―」（『蓮花寺佛教研究所紀要』第四号、二〇一一年）
- (13) 箕浦尚美『『観無量寿経』の本文―「称南無無量寿仏」を含む伝本をめぐって―』（『日本古写経善本叢刊』第三輯、三四三―三五二頁。国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編・発行。二〇〇八年）
- (14) 久米舞子「金剛寺聖教にみえる僧仁範の足跡」（『日本古代の地域と交流』九七―一九頁。臨川書店。二〇一六年）
- (15) 『英賀郡』の「英賀」二文字はやや判読困難であるが、残画と他の歴史資料から十分想定できる。
- (16) 久米舞子氏は、この奥書に見られる「貞元二年」（九七七）を他の資料との関係から長元二年（二〇二九）の誤りとするが、仁範が年号を間違えたとは思えない。仁範自筆本を後人が書写した際の誤りとするならば想定可能である。しかし、そうなると書写する際に訓点（ヨコト点）も移点しなければならないが、訓点を別人の筆とするには確たる証拠を採す必要がある。
- (17) 荻原雲来「尊勝陀羅尼の研究」（『密教』第二巻第一号。明治四五年）／『荻原雲来文集』所収。昭和一三年）。干潟龍報祥「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」（『密教研究』六八号。昭和一四年）、「三、法隆寺貝葉梵本について」

【参考文献】

- 石井公成「伝勒那摩提の『七種礼法』について」(『印度学仏教学研究』三二・二・一九八四)。
影印版『医心方―半井家本医心方(6)―』オリエント出版社。一九九一年。
- 荻原雲来「尊勝陀羅尼の研究」(『密教』第二卷第一号。明治四五年)、『荻原雲来文集』所収。昭和十三年)。
- 久米舞子「金剛寺聖教にみえる僧仁範の足跡」(『日本古代の地域と交流』所収。臨川書店。二〇一六年)。
- 孫猛著『日本国見在書目録詳考』(上海古籍出版社。二〇一五年)。
- 寺本婉雅著『ターラナータ印度仏教史』(丙午出版社。一九二八年)。
- 『日本国見在書目録』(『続群書類従』雑部三四卷)。
- 干潟龍報祥「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」(『密教研究』六八号。昭和一四年)。
- 福井重雅編『中国古代の歴史家たち―司馬遷・班固・范曄・陳寿の列伝訳注』(早稲田大学出版部。二〇〇六年)。
- 不空訳『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』(金剛寺聖教二八―九三)。院政期写本。
- 箕浦尚美『観無量寿経』の本文―「称南無無量寿仏」を含む伝本をめぐって―
(『日本古写経善本叢刊』第三輯。国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編・発行。二〇〇八年)。
- 山野智恵(千恵子)「ナーガールジュナと医術―『龍樹眼論』の成立と展開―」
(『蓮花寺佛教研究所紀要』第四号、二〇一一年)。
- 山田憲太郎『香料博物事典』(同朋舎。一九七九年)。
- 同『東亜香料史研究』(中央公論美術出版。昭和五一年)。

金剛寺聖教に見られる『龍樹菩薩和香方』逸文（落合）

二〇

キーワード・龍樹、龍樹菩薩和香方、仏頂尊勝陀羅尼儀軌、金剛寺聖教、医心方、日本国見在書目録

* 本稿は、二〇二〇年一月二八日に開催された「佛教文獻與文學國際學術檢討會」（於國立政治大學百年樓／オンライン会議）での基調講演「龍樹と香葉―附『龍樹菩薩和香方』逸文―」と題して発表した原稿をもとに若干の訂正を行って成文したものである。

* 本稿は「奈良朝勅定一切経」の総合的研究―漢文仏教テキストの資料的基盤の再構築に向けて―（科研費（A））。課題番号 20H00008）に依る研究である。

Summary

Nāgārjuna and The Fragrant Medicines Appendix: Fragments from the Lost Text *Nāgārjuna Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances*

OCHIAI Toshinori

Nāgārjuna, widely celebrated in East Asia as the patriarch of eight schools, was not only a major figure in the history of Buddhist philosophy. He appears to have also left works of traditional medicine and pharmacology. One title found amongst the texts attributed to the famous author by Chinese scriptural catalogues is *Nāgārjuna Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances* 龍樹菩薩和香方, translated by Ratnamati 勒那摩提 (in the first half of the 6th century?).¹ It is generally believed that this text was

¹ The *Lidai sanbao ji* 歷代三寶紀 notes: 'Nāgārjuna Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances, 1 scroll, 50 methods' 龍樹菩薩和香方一卷凡五十法, translated by Ratnamati 勒那摩提 (T49, p86b18). Similarly, the *Da Tang neidian lu* 大唐內典錄 records: 'Nāgārjuna Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances, 50 methods' 龍樹菩薩和香方凡五十法 (T55, p269c2), adding that 'the six works listed to the right [i. e. above] have a total of 24 scrolls. During the time of Emperor Wu of the Liang Dynasty, the *Tripitaka* Master Ratnamati, [originally from] the Middle Regions of India, also called [Ratna] vati, or 'Jewel Mind' in Chinese, arrived in Year 5 of the Zhengshi era [i. e. 508], and translated [Buddhist scriptures] in the Luoyang Palace. In the beginning, Bodhiruci co-operated in the transmission [of the Dharma], but later the two fought and parted over the translation [of Buddhist scriptures]. Śramaṇas Sengliang and Jueyi as well as the Imperial Councillor Cuiguang, etc. assisted in wording and editing the [Chinese] translation of the **Vajramaṇḍadhāraṇīsūtra*.' 右六部。合二十四卷。梁武帝世。中天竺國三藏法師勒那摩提。或云婆提。魏言寶意。正始五年來在洛陽殿內譯。初菩提流支助傳。後相爭別譯。沙門僧朗覺意。侍中崔光等筆受金剛上味陀羅尼經。The *Kaiyuan lu* 開元錄 writes: 'Nāgārjuna

lost by the middle of the Tang dynasty. The manuscript was apparently transmitted to Japan,² but its whereabouts became unknown in the Insei period of late Heian.

We are very fortunate, however, that a Tendai scholar-monk attached fragments of this text at the end of a scroll containing the *Foding zunsheng tuolani niansong yigui* 佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌, translated by Amoghavajra 不空, as additional materials for reference. A copy of this text is found in the Kongō-ji Collection of Sacred Teachings 金剛寺聖教 at the Amano-san Kongō-ji 天野山金剛寺 Monastery in Kawachi Nagano City, Osaka Prefecture.³ The title of this additional material is, however, given as 龍樹菩薩合香方 rather than the usual 龍樹菩薩和香方, which I shall also adopt here.

The Kongō-ji manuscript cites three entries 三條 (i.e. 'methods' 法). According to the scriptural catalogues, we know that *Nāgārjuna Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances* contained 'fifty methods' 五十法, which means that the citation represents about 6% of the entire original. It is plausible to assume that the Shingon monk-scholar had access to the entire text of *Nāgārjuna Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances* and chose to cite this fragment.

Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances, translated by the same [Ratnamati], 1 scroll, 50 methods. Now, since it does not [contain] teachings of the *Tripitaka*, I do not register it [i. e. consider it part of the Buddhist Canon]. 龍樹菩薩和香方一卷凡五十法。今以非三藏教故不録之。Furthermore, a few centuries prior to Ratnamati, Fan Ye 范曄 (398~445), the author of the *Book of the Later Han Dynasty* 後漢書, also wrote a work entitled *Prescriptions of Mixing Fragrances* 和香方 (see *Song shu* 宋書, Scroll 69). Judging from the title, the content appears to have been similar to Ratnamati's translation.

² See *Nihonkoku kenzaisho mokuroku* 日本国見在書目録 (『続群書類従』 雑部 34, 三卷 884).

³ *Foding zunsheng tuolani niansong yigui* 佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌, translated by Amoghavajra, catalogued as *Kongō-ji Shōgyō*, 28-93 (金剛寺聖教 28-93), is a manuscript dating to the Insei 院政 period.

Until now it has been believed that the *Nāgārjuna Bodhisattva's Prescriptions of Mixing Fragrances* had been lost in its entirety. This is the first time when a fragment from this text is brought to the attention of the academic community. Although it represents only 6% of the original, this citation is doubtless an important textual witness which opens an window to the content of the entire work.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*